

# 真坊と和尚さま

小川未明

青空文庫



夏なつ休やすみの間あいだのことでありました。

がき大だい将しょうの真しん坊ぼうは、先さきにたつて、寺てらのひさしに巢すをかけ  
たすずめばちを退たい治じにゆきました。

「いいかい、一、二、三で、みんないっしょに石いしを投なげるのだよ、  
うまく命めい中ちゆうしたものが偉えらいのだから。」と、いいました。み  
んなは、目めをまるくして真しん坊ぼうのいうことを聞きいていました。

「はちが追おいかけてくると、こわいな。」と、臆おく病びような常つねちや  
んが、いいました。

「追おいかけてきたら、竹たけの葉はでたたき落おとそうよ。」と、真しん坊ぼう  
が、いいました。

「ああ、それがいいね。」と、英ちやんが、同意しました。

「みんなが、竹やぶへ行って、竹を切つてこようや。」と、誠くんが、いいました。

「ああ、竹を切つてこよう。」

四、五人の子供たちは、寺の竹やぶへ竹を切りにゆきました。やがて、てんでに、手ごろの青々とした、葉のついている竹を切つたり、折つたりしてきました。

「さあ、これでいい。」

そういつて、みんなは、往來で石を拾つて、お寺の境内へ引き返してゆきました。

「だれが、号令をかけるの？」と、誠くんが、いいました。

「まあ、待ちたまえ、僕は、それはうまいから、ひとつうまくあの巢すに当あててみせようか？」と、真坊しんぼうが、いました。

原はらつぱで、野やきゆう球ゆうをするときに、ピッチャーをしている真坊しんぼうのいうことを、みんなは、だまって聞ききながら、承しょう認にんしなければなりませんでした。

「命めい中ちゆう中ちゆうさしてごらん。」と、みんなは、手てに石いしを握にぎつたまま、真坊しんぼうのするのを見みていました。

真坊しんぼうは、ボールを投なげるときのように、片かた足あしを揚あげて、高たかいひさしにかかっている、円まるいはちの巢すをねらつて石いしを投なげました。石いしは、まっすぐにひじょうなスピードをもつて、うなつていったが、巢すをはずれて、ひさしの板いたに当あたると、大おおきな音おとをたて

てはね返りました。

この音が、あまり大きかったので、みんなはびつくりして、そこから、門の方に向かって逃げ出しました。

「真ちゃん、だめじゃないか、こんど僕がうまく命中してみせるよ。」と、英ちゃんが、いいました。

「ああ、みんなが一度ずつやってみようよ。そして当たらなかつたら、一、二、三で、いっしょに投げることにしよう。」と、真坊が、意見を持ち出しました。だれも、がき大将の意見に反対するものがありません。

「さあ、英ちゃん、うまくお当てよ。」と、ほかの子供たちは、英ちゃんをばげました。英ちゃんは石を握って、足音をし

のんで境内へ入つてゆきました。そして、上を見て石を投げました。石は、太い柱に当たつて、足もとへはね返つて落ちたので、あわてて逃げてきました。

「こんど、誠くんだ！」

やはり、石は、うまく当たりませんでした。最後にいちばん臆病な常ちやんでした。もとより、うまく当たりつこがありません。せん。

「さあ、みんなが、いっしよに投げるのだよ。」と、真坊は、いって、

「一、二、三つ。」と、号令をかけました。

石は、散弾のように、はちの巣を目あてに飛んでいって、ば

らばらと当たり<sup>あ</sup>に当た<sup>あ</sup>って、大きな音<sup>おと</sup>がしました。

すると、同時<sup>どうじ</sup>に、

「だれだ！」と、大きななり声<sup>こゑ</sup>がして、庫裏<sup>くり</sup>の方<sup>ほう</sup>から、和尚<sup>おしょう</sup>さまが飛び出<sup>だ</sup>してくるけはいがしました。

みんなは、大急ぎ<sup>おおいそ</sup>で、首<sup>くび</sup>をすくめて逃<sup>に</sup>げてきました。

「明日<sup>あす</sup>、ラジオ体操<sup>たいそう</sup>にゆくと、和尚<sup>おしょう</sup>さまにしかられるかもしれない。」と、常<sup>つね</sup>ちゃんがいきました。村<sup>むら</sup>では、毎朝<sup>まいあさ</sup>みんなが寺<sup>てら</sup>の境内<sup>けいだい</sup>に集<sup>あつ</sup>まって、ラジオ体操<sup>たいそう</sup>をすることになっていました。

「わかりはしないや。」と、英<sup>えい</sup>ちゃんが、いいました。

「しかられたって、こわくないね。真<sup>しん</sup>ちゃん。」と、誠<sup>まこと</sup>くんが、



真坊しんぼうの考えかんがをききました。真坊しんぼうは、にやり、にやりと、だま

つて笑わらつていました。彼かれは、このあいだから、一人ひとりで、はちの巢すに向むかって石いしを投なげていたからであります。

「いいよ、しかられたら、僕ぼくだとおいいよ。」と、真坊しんぼうが、い  
いました。

「真ちゃん、しかられたつていいのかい。」と、ほかの子供こどもたちが、ききました。

「僕ぼくは、ゆかないから。」と、真坊しんぼうが、いいました。

「真ちゃん、ラジオ体操たいそうにゆかないの？ 休やすまずにいくと、ご褒美ほうびがもらえるのだよ。」と、常つねちゃんが、いいました。

明あくる日ひ、ラジオ体操たいそうに真坊しんぼうの姿すがたは見みえませんでした。も

う二、三日で、終わりになるのです。

ところが、いちばん最後の日に、真坊は、やってきました。友だちは、しばらく見なかった真坊がきたので、そばへ寄ってきて、

「真ちゃん、どうしたんだい。ご褒美は、昨日みんながもらったんだよ。」と、いいました。

「メダル？」と、真坊は、つまらなそうな顔つきをしました。  
「ううん、ミルクキャラメル。」

「キャラメルなら、ほしくないや。」と、真坊は、にやりと笑いました。そして、体操が終わって、帰るときです。どこから出てきたか和尚さまが、

「こちら、真坊しんぼう！ おまえのはここにがある。」と、いつて、ミル  
クキヤラメルを下くださつて、真坊しんぼうの頭あたまをくるくるとなでられまし  
た。

このとき、真坊しんぼうは、和尚おしょうさまの厚意こういをうれしく思おもつて、こ  
ののち後、はちの巢すに石いしを投なげまいと心こころに誓ちかつたのであります。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年10月31日

※表題は底本では、「真坊《しんぼう》と和尚《おしょう》さま」となっています。

※初出時の表題は「真坊と和尚様」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 真坊と和尚さま

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>